

# 4年間の多くの学びや経験を力に変えて 自ら答えを模索し、開拓できる保育者に

生まれ育った家庭環境から、「自然と教育の道を選んだ」とおっしゃる坪井先生。  
大学院時代の研究や、現在行われている小学校の生活科の研究を通して幼小連携を考察し、  
今後の幼児教育のあり方と小学校教育へのつながりについても考えていらっしゃいます。  
また授業でもご自身の研究内容を反映させながら講義を行い、  
「常に自分で答えを模索・開拓できる保育者になってほしい」と指導にあたられています。



坪井 貴子 教授

金城学院大学  
人間科学部  
現代子ども学科

上越教育大学卒業後、広島大学大学院教育学研究科博士課程へ。中九州短期大学、高松短期大学、関西福祉大学を経て2006年から現職。研究テーマは「幼児の遊びと学習に関する研究」「保育者の専門性に関する研究」「幼小連携」。日本保育学会ほか所属。

## 「ごっこ遊び」に注目し 大学院で教育を研究

父が教員だったことから、自分も自然と教育の道を選びました。大学も学校教育学部を選択し、小学校と幼稚園教諭の免許を取得。さらに教育の学びを深めて大学で教鞭を執りたいと思い、恩師のすすめで大学院へ進学しました。ちょうど幼児教育の重要性が注目されはじめたところで、大学における教育の需要も高まってきたころだったと思います。

大学院では子どもの「遊びによる学び」について研究、遊びの中でも特に「ごっこ遊び」に焦点を当てて考察を行いました。現実とは違い、ごっこ遊びとはあくまでも仮想の世界の中で行われます。しかし、子どもたちの行動を見ると、実にスムーズかつ現実感を持って物事が展開していきます。ごっこ遊びを通して大人を真似しながら、周りの世界を知り、人間関係を構築しているのです。それが成長してからの現実社会で役に立っていくことに興味を持ち、研究を続けてきました。

大学院修了後は短期大学へ就職しましたが、「学生たちが4年間かけてじっくりと学び、成長していく姿を見ていたい」と思うようになり、4年制の大学へ移ることを決意。縁あって、金城学院大学で教えることとなったのです。

## 生活科の授業研究を通して 幼小連携の重要性を考える

現在は、小学校1・2年生の生活科の研究を通して「幼小連携」について



### 坪井先生はどんな人!?

坪井ゼミの4年生のみなさんに先生の印象を伺いました。すると「とても親しみやすく、自分たちとの距離が近く感じられるフレンドリーな先生」との声が多くあがりました。また、「ユーモアがあって授業もわかりやすい」「物事の違った見方を教えてくれる」などの声も聞かれみなさんから厚い信頼を受ける先生の人柄を窺うことができました。



坪井先生が担当する授業の風景

考察しています。昨年、特別研究期間をいただき、さまざまな小学校の生活科の公開授業などを訪れました。いくつかの学校を見て回るうちに、そのときの自分自身の考えや思いに合う先生に出会うことができ、すぐに研究をさせていただきたいとお願いをしました。大変お忙しい先生でしたが、快く引き受けてくださいました。

生活科は、1992年から小学校1・2年生を対象に行われている授業です。たとえば1年では学校探検を行ったり、あさがおの栽培などを行います。2年生では街の探検やおもちゃの製作など、生きた教材を使って、ときには仲間と協力しながら問題解決を行い、自立の基礎を築いていきます。

これら生活科も含め、学校の授業は子どもにとっても教える側にとっても特殊な時間・空間となりがちです。しかし私が研究している授業は先生の綿密な授業計画のもとにありながらも子どもと先生の間には「本物」の生活が成り立っています。そこに大変興味を惹かれ、現在も先生が教えていらっしゃる授業をビデオで撮影して研究を続けています。

こうした生活科の授業は幼児教育と小学校教育をつなぐ重要な位置にあります。幼稚園や保育所の保育者と小学校の教員が密接な連携をはかることは子どもの成長を促す上でとても大切なことであり、昨今では幼小連携に力を入れる動きもよく見られます。今後は小学校教育まで見通して保

育を考えていく必要に迫られることでしょう。そこで、生活科の特性や子どもの学習を明らかにしながら、今後の幼児教育のあり方と小学校教育のつながりの研究へと発展させていきたいと考えています。

## 教育の学びや経験を活かし 模索し、開拓する力を養成

現在は保育所実習担当や保育原理、幼児教育学、2年生から4年生までの演習などを担当し、小学校の生活科の研究を通して、私自身の授業のすすめ方が変わってきたと実感しています。以前は一方的に講義を行うことが多かったのですが、今は学生の声を聞いて授業を組み立てることを重要視しています。たとえば演習や講義科目では、学生が発表する機会を増やして、学生が主体的に授業に取り組めるように心がけています。また学生同士の意見交換ができるようにすることで、学生自身の考えをさらに深めていき、しっかりと講義内容が理解できるように努めています。

保育とは小学校の教科や学習指導と違い、子どもの年齢が低いこともあり、遊びや日常生活の何が子どもの学びにつながるか、どこに子どもの育ちが見られるかの見極めが大変難しい分野です。保育者をめざす学生の大学での学びは子どもへの理解を深め、子どもの遊びや生活の意味、価値がどこにあるかを追求することが大切です。また保育者とは個別性の強い仕事であり、「これが正解」という答えはなく、常に自分で答えを模索し、開拓しながらすすめていかなくてはなりません。その力を大学4年間のさまざまな学びや経験を通して養うのです。

この大学にはそうした多彩な学びや経験があり、学生たちは4年間で教育の知識をしっかりと身につけて卒業していきます。どんなことでも乗り越えられる力を身につけた学生たちを送り出せることを、毎回大変誇らしく思っています。これからも多くのすばらしい保育者を社会に送り出せるように、引き続き教育の研究に携わっていきたいと考えています。